

『お掃除のおばさん』

斉藤砂糖子

3,290 文字

15 歳の僕に起きた出来事。

それは 21 歳の僕に、小さくて大きな変化をもたらしたんだ。

9月の空を見ている。
動く雲と動かない雲が、それぞれバランスを取りながら存在している。

*

15歳になった2か月後、僕はある重い病気で小児病院に入院した。
中学生も小児病院なのかと、僕自身もその時初めて知った。無論多くは小学生以下だ。

病名は伏せたいが、化学療法でしか治せない病だったということで察していただきたい。

その病院は築30年以上の古い病院で、おそらくその頃は不治の病の子どもが、日常から切り離されて「のんびり過ごせるよう」配慮したのだろう、普段誰も来ないような郊外にあった。

そんな不便な場所にもコンビニとガソリンスタンドはあり、車で来る親たちは子供にせがまれた食べ物を買ってきては持ち込む。それが外の自由な世界との唯一の接点だった。

そこそこ都会に生まれ育った僕には、こんなド田舎の、しかもカーテンだけで仕切られた8人部屋に突然ぶち込まれたことは耐え難いことだった。

自分は中学生だというのに、古い狭いこのスペースには、プライバシーなんてものは無いに等しい。目の前の「ガーグルベースン」という名のピンクのゲロ吐き用の容器を睨みながら、黙って毎日毎日を耐えていた。

病院にはいろんなスタッフがいて、入れ替わり立ち替わりカーテンを開けては僕に話しかける。

医者、看護師、院内学級の先生、理学療法士、あとよくわからない心理カウンセラーなど。

それからお掃除スタッフのおばさんも一日に何度も顔を出してくる。

一回鼻をかんだティッシュ1枚でも、定期的に誰かやってきてごみを回収し、そこらへんを拭いていく。「こんなボロくなった病院、そんなマメに掃除しても変わらないだろ。」と僕はひそかに思っていた。

他のスタッフと違って、お掃除のおばさんたちはどこか遠慮がちだ。

「失礼致しますう。お掃除させていただきますう。」と言った後は、自分の存在を消すようにしながら作業をしていく。

こちらにしても、掃除のおばさんたちに特別目を向けることはない。

だけど、ある日、定期的に来てくれるお掃除おばさんの中に、一人だけ雰囲気の違い

人がいることに気がついた。

うまく言えないけど、ちょっと上品というか、失礼ながら他の人のような「おばさん然」とした感じもない。主婦で普通にリビングにゆっくり座ってる方が似合うような気もする。

慣れた手つきで実に要領よく掃除をしていく。僕がテーブルを使っている途中で、触ってほしくない時などはそっとしてくれる。

ある時はスプレーを使い、ある時はウェットティッシュやコロコロなども使う。手早いけれど、無感情なお仕事感はなく、自分の家でも掃除しているような感じだ。

中には手を止めて僕と喋りたそうな目をしてくる人もいるが(そんな時僕は寝たふりをする。おしゃべりなおばさんは苦手だ。)そういうタイプじゃない。

ちょうどいい、って難しいことなのだ。

長期入院の子ども達は皆、少しでもいいから家に帰りたと思っている。

病院側もできるだけ院内学級のない週末は帰宅できるよう配慮してくれている。

しかし、週3回の血液検査の数値が低ければそれは叶わない。

「ごめんね、今週はここにいてくれるかな？」と主治医に告げられる。

僕はその頃、薬のダメージでなかなか家に帰ることができなかった。

8人部屋に、たった一人で夜を過ごす。

普段の騒がしさが無いのはホッとするが、やはり取り残された感じは寂しい。

患者が少ないと病院スタッフも少人数で、手のかからない僕はほったらかしに近い。

その日、朝から調子が悪かった。

頭は痛いし、猛烈に身体がだるい。寝ている間に朝食が来ていたが、食べる気なんてしない。

やばい、動けない。気持ち悪い。誰か来てくれ。

でもトイレにいったらみようかな。ゆっくり…ゆっくり…。

その瞬間、「あ、…だめだ…」

僕はベッドから降りようとして、崩れ落ちるように倒れた。

…誰か、助けて…。助けて…。

ナースコールなんて届かない。

僕はほったらかしの8人部屋の奥で人知れず「助けて下さい…」と声にならない声を出していた。

そこへ、「まあ！大変！！ちょっと待ってて！看護師さ～ん！看護師さ～ん！」と持っていた掃除道具を置いて猛ダッシュで駆け出すおばさんの足が見えた。

ああ、良かった…。危なかった…。

看護師に抱き起こされて、その奥にもものすごく心配そうに僕を見ている顔があった。あの掃除のおばさんが見つけてくれたんだ。

それから丸一日、「念のため」ということで集中治療室に入れられた。ご飯も食べさせてもらえず、あちこちつながれて、人間の欲という欲は全て奪われたようなつらい一日だった。

しかし、幸いにも血圧・体温・血液の数値は安定し、もとの部屋に戻ってこれたので、あのおばさんが来た時には必ずお礼を言おう・・・と思っていた。

僕は今までも何となく感じていた。あのおばさんは、他の人と違う理由で働いている。

例えば、自分の子どもがここにいたとか。じゃないのか。

あの時の表情、ダッシュ・・・。

そしてその予感は的中する。

「あの・・・ありがとうございました。助けてくれて。」と言った僕に「いいえ。良かったです、無事で。昔、うちの息子もここでお世話になって・・・」と言いかけて、はっとしたように言葉を切り「・・・だから良かったです。」と結んで、軽く一礼して行ってしまった。

あの人は、僕がおしゃべりが好きでないことに気が付いて、途中で話を切り上げてしまったようだ。でも、やっぱりそうか、と僕は思った。

そしてその息子が、その後どうなってしまったのか、については聞けない。

この病院ではお互いに予後についての詮索しないことが暗黙のルールだ。

聞いてどうする。

ここから先の運命なんて、誰にもわからない。僕だってそうだ。

こんなことがあって、少しでも掃除のおばさん達の負担を減らしたいと、自分のスペースをきれいに保つよう心がけるようになった。

消しゴムのカスも、食べた後のごみも勿論散らかしたりしない。

テーブルが拭きやすいように、勉強道具もできるだけ整然としておくようになった。

相変わらず、積極的に誰かと喋るということはなかったけれど。

それから数か月後、病院は都心に移転した。

僕が入院する何年も前から決まっていたことらしい。

僕の家にもかなり近く、高層階の病室の窓からは見慣れた街の風景が見える。(しかも個室だ。)

もう、古く憂鬱なただっ広い庭など見なくてもいい。

主治医と看護師もそのまま新病院に来ていて、何の心配もなく快適だ。

ただ、あの掃除のおばさんたちは、来なかった。

新しい病院は、前とは別の清掃会社に委託をしたらしい。

見慣れない制服を着た、いくらか若いスタッフが、時間になると遠慮なく僕の部屋にきては、機械のようにテーブルのものをどかしながら掃除していく。

まあ、それも良いだろう。それが仕事というものだ。
そうして、もうすぐ退院する僕の部屋を、僕の形跡を一切残さずきれいにして下さい、と
思った。
次に入る患者が少しでも快適に過ごせるように。

*

僕は、21歳になった。大学生になった僕はカフェでアルバイトをしている。
重い病気だったことなど、誰にも想像できないほど、すっかり元気になった。
店に来るお客さんは、それぞれ見えないカーテンで仕切られているように、自分の空
間を楽しんでいる。僕はまぶしくそんな風景を見ている。
僕はここに来る人がリラックスして過ごせるように、目を配る。
キレイな空間であることはとても大事だ。邪魔にならぬよう、心を込めて掃除する。
状況に応じていろんな掃除用具を使い分ける。一見汚れてないようでも、ちゃんと定期
的にキレイにしておかないと誰かが困るような気がする。
あ、新しいお客さんが入ってきた！
「いらっしゃいませ！」

この頃僕は思う。あのおばさんの息子も、ちゃんと元気になったのではないかと。
今頃、孫なんかを迎え入れるために、またあちこち掃除してるんじゃないかな。
そうだよ、きっと。

カフェの窓から見える空は、今日も青く澄んでいる。
青を背景にして、雲は、それぞれ思い思いの形で浮かんでいる。
(了)